



# かかやく子ども

～自立と共生の礎を培い、今と未来を豊かで創造的に生きる子どもを育てる学校～

## もっとチャレンジ!～かんがえる子ども すすんでする子ども 共に生きる子ども～ いよいよ活動的な季節になりました…

4月28日から5月9日までの家庭訪問では、お忙しいなか、ありがとうございました。お伺いしましたことなどは今後に役立てていきたいと思えます。

5月に入った途端、昼間の気温が一気に上がってきました。

「毎年、こうだったろうか?」

「誰かが季節のダイヤルを一つ回し過ぎたのではあるまいか!」

など思ってしまう。

外界の変化に体を合わせていくのは大変です。

長い休みが終わって、心の方ももう一つ本調子になれないなあ…という子どももいるかもしれません。

ただ、自然の営みも人の活動もいよいよ活気を帯びる時季になったのは間違いないようです。

学校では、授業にもその他の教育活動にも力が入っていきます。



《5月の授業風景から》

気を張って新しい学年をスタートさせておおよそ1か月…。その後のGWを終えた子どもたちには、

「新たな目標を!」でもよいのですが、それよりは、

「新しい学年になったときに抱いた願いや目標はなんだったろうね?」

「必要であれば、今のうちに見直すとよいよ!」

と声をかけたいように思います。

ご家庭でもよろしくお願いします。

(清水 康行)

### メールサービスの更新手続きはお済みですか?

学校からの緊急のお知らせなどをするためのメールサービスの更新をお願いしています。

手続きはもうお済みですか。無事に更新していただけた場合は、毎月初旬に配信する“定期メール”を受信していただけることになっています。

前回は5月1日に配信し、次回は6月5日に配信する予定です。

「更新したはずなのに、テストメールが届かない!?」と思われるようなことがありましたら、遠慮なく、学校までお申し出ください。

# 私の黒子のこと…

「目の横にあるのなに？」

毎年、何人かの一年生がそう尋ねてきます。  
「ああ、今年の一年生も聞くのだな…」

私の左目の脇、やや下のところに大きめの黒子があり、入学して初めて私に出会った一年生のなかには、素直に、素朴に「あれ、なに!？」って思う子どもがいるようです。

幼い子どもは、目の前のことだけに気を取られがちです。

黒子のことを訝しがる子どものことも、見て思ったままを口にしていただけだとわかりますので、私も気にすることはありません。

もしかすると、見慣れないものに違和感を感じているところがあるのかもしれない。

それならば、他者に対するそのような違和感はいずれ薄めていってほしいとは思いますが、人はみなそれぞれですし、自分（たち）と違うところを否定したり、忌避したりする人間にはなってほしくないと思うからです。

でも、私の黒子のことでは理屈っぽくなりたくはありません。尋ねてきた子どもには、「これは校長先生の目印だよ」とか「校長先生のスイッチだよ」とか言って返しています。

※ ※ ※

それにしても、おもしろいものです。

他人が気にすることを当の私はほとんど気にしていません。

気にしないと言うより、当人である私には見えていないのです。

自分のことなのに自分で見えないのはなぜか？

それは、その黒子が私自身の顔面にあるからです。

人が他者に対するとき最も“ワタシ”を表しているはずの自分の“顔”を“ワタシ”

本人は直に見ることができません。

私も鏡を覗くようなときにしか、自分の顔にあるその黒子を見ることはないのです。

※ ※ ※

他人が気にする自分のことを自分では本当に見ることができない。（鏡で見えるのは、他人が見ているとおりのものではないのかもしれない。）

反対に、その人本人には見えていなかった、気にもしていなかったその人自身にかかわることを他人が気にする。

本当におもしろい話です。

※ ※ ※

私の黒子は、初めて出会った人を少しびっくりさせるかもしれませんが、でも、それ以上のものでもないと思います。誰かに迷惑をかけた覚えはなく、「放っておいてよ」と言っただってよい領分のことです。

でも、若い時分の私だったら、今のようと言われることをもっと気にして、自分のその黒子に引け目を感じたと思います。

※ ※ ※

人は誰もがそれぞれに私の顔の黒子のよなもの…他人には見えるけれど、自分には見えず、元々、気にしていなかったもの…、尤も本来、気にするまでもないもの…を持っているのかもしれない。

なのに、場合によっては、それがその人の小さな引け目や劣等感みたいなものになってしまう。そして、そのような引け目や劣等感は、自分ではなく、他人によってもたらされる…。

これでは、おもしろい話ではなくて、変な話です。

さて、私の黒子ですが、もう57年のつきあいです。これだけ、子どもに気に入って(?)もらえるのであれば、やはり、私の大切な一部であると言えます。（清水康行）